

YMFS
www.ymfs.jp

平成25年度
ヤマハ発動機スポーツ振興財団
年間事業報告書

YMFS

公益財団法人
ヤマハ発動機スポーツ振興財団
Yamaha Motor Foundation for Sports

〒438-8501 静岡県磐田市新貝2500
Tel. 0538-32-9827 Fax. 0538-32-1112

公益財団法人
ヤマハ発動機スポーツ振興財団
Yamaha Motor Foundation for Sports



平成25年度の 事業活動を振り返って



平成 25 年度の日本のスポーツ界の大きな動きを振り返りますと、ご承知のように昨年 9 月 IOC 総会での 2020 年オリンピック・パラリンピックの東京開催が決定し、スポーツ界をはじめ、日本全体にとっての新たな、そして大きな目標ができました。来たる東京大会を通じて、次世代につながる有形無形のレガシーを残し、スポーツの価値や被災地の復興を含め、日本の活力を世界に大きく発信する機会になることを願っています。また、我が国のスポーツ推進の基本方針である「スポーツ基本計画」に沿って、平成 26 年度から健常者と障がい者の競技スポーツが文部科学省に一元化されたこと、そしてスポーツ庁構想実現に向けた活発な論議など、今後、競技力向上をはじめ、スポーツを通じて全ての人々が幸福で豊かな生活を営むことができる社会の創出に向け、さまざまな環境整備が着実に進められていくことを期待しています。微力ながら当財団もその一端を担っていきたいという思いを新たにしております。

スポーツを取り巻くこうした社会情勢の中で、当財団の平成 25 年度の事業は、「新たな価値づくり（社会的価値）」と「事業の質向上」を基調とした中期事業方針 2 年目の活動を展開しました。関係各位のご協力のもと、当財団の特徴を活かしながら社会ニーズを踏まえた諸施策の見直しや円滑な運営を進め、各事業分野とも概ね当初計画通りに進捗し、次年度につながる一定の成果を上げることができたものと考えています。

設立後 8 年目を迎える平成 26 年度も、公益法人という枠組みの中での民間らしさ「YMFSらしさ」を大切にし、「新たな価値づくり（社会的価値）」と、さらなる「事業の質向上」にチャレンジしていきたいと考えています。今後とも引き続きご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成 26 年 3 月
公益財団法人 ヤマハ発動機スポーツ振興財団
理事長 木村 隆昭

平成25年度 ヤマハ発動機スポーツ振興財団 年間事業報告書

平成 25 年度の事業活動を振り返って	3
ヤマハ発動機スポーツ振興財団について	4
1. スポーツチャレンジ助成事業	6
2. スポーツ振興支援事業	10
3. スポーツ文化・啓発事業	14
【まとめ】図表で見る YMFS 事業活動の推移	18
事業推進体制	19

ヤマハ発動機スポーツ振興財団について

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団（YMFS）は、モータースポーツやマリンスポーツ、またサッカーやラグビーにおいて豊富な普及・振興活動の実績を持つヤマハ発動機株式会社の創立 50 周年事業の一つとして、平成 18 年（2006 年）11 月に設立しました。豊かな人間性の涵養に効果的なスポーツの振興、およびスポーツ文化の向上による国家社会への貢献を事業目的として活動しています。

平成25年度 年間事業活動の実績

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
事業共通		◆5/24第1回理事会					◆10/25第2回理事会				◆2/26第3回理事会	
助成事業			◆6/21 評議員会 評議員選定委員会			◆8/30募集リリース 第8期生募集期間 (9/2～11/18) ◆9/9・28中間報告(体験) ◆9/21・25・26中間報告(研究/奨学)			◆12/11・12 1次審査(書類選考) ◆1/20・21 2次審査(面接選考) ◆3/14～16 チャレンジャーズ ミーティング			
スポーツ振興支援事業	◆4/14始業式	◆5/25体力測定	◆6/21抽選 ◆7月初旬～教材配布	◆7/21水辺の安全講習会 ◆7/31～8/4夏季合宿 ◆8/23～25外洋帆走訓練	◆9/15保護者会			◆11/16体力測定				◆3/9修了式 ◆3/21～23 セーリングチャレンジカップ
スポーツ文化・啓発事業			◆6/10募集リリース	◆7/1～9/30水辺の風景画作品募集		◆10/15予選会 ◆10/24本選会 ◆11/1結果発表		◆11/下旬～12/月上旬 大臣賞表彰式			◆3/6～9 ボートショー 展示	
スポーツ文化・啓発事業	◆4/9スポーツチャレンジ賞表彰式					◆9/20～11/18スポーツチャレンジ賞公募		◆12/11・12 第1回審査会 ◆1/20・21 第2回審査会				
調査研究		◆5/14 第1回調査研究委員会 ◆6/14 ワーキンググループ合同会議		◆8/20 第2回調査研究委員会		◆11/21 第3回調査研究委員会					◆3/6 第4回調査 研究委員会	
情報発信			「Do the Challenge」◆Vol.7	◆Vol.8				◆Vol.9				◆WEDGE掲載
情報発信		◆平成24年度年間事業報告書										



事業活動の概要

ヤマハ発動機スポーツ振興財団は、豊かな人間性の涵養に効果的なスポーツの振興、およびスポーツ文化の向上による国家社会への貢献を事業目的として活動しています。

スポーツ文化・啓発事業

スポーツチャレンジ賞(表彰)や調査研究活動をはじめ、各事業の実績や知見、情報を広く社会に発信しています。



P.14

スポーツチャレンジ助成事業

世界に翔ばたく逞しい人材の育成をめざし、スポーツを通して夢・目標の実現に向かってチャレンジする人をサポートしています。



P.6

スポーツ振興支援事業

心身ともに健全な子どもたちの育成をめざし、スポーツをより身近に楽しむことや、自然・水辺体験を促進しています。



P.10

1. スポーツチャレンジ助成事業

スポーツチャレンジ助成事業は、スポーツを通じて自己の夢・目標にチャレンジするアスリートや指導者、研究者等の活動を支援する当財団の中核事業です。チャレンジャー自身による目標管理、その進捗・成果を発表する報告会、また分野を超えた交流により刺激や気づきを促進する独自のサポートプログラムにより、競技や研究の成果向上を支援するとともに、社会にとって有用な逞しい人材の育成をめざしています。

【スポーツチャレンジ助成の概要】 アスリート、指導者、審判、スポーツジャーナリストなどを対象にした「スポーツチャレンジ体験助成」、スポーツ医・科学、スポーツ文化などの研究者を対象にした「スポーツチャレンジ研究助成」は、ともに毎年それぞれ10件程度の個人・グループを採択し、1件あたり100万円を上限に助成を行っています。また、日本人の海外留学生および外国人留学生を対象とした「国際スポーツ奨学金」は、それぞれ毎年若千名に対して月額10万円の奨学金給与を行っています(最長2年間)

(1) 平成25年度(第7期生)およびOB・OGチャレンジャーの主な実績

スポーツチャレンジ助成の対象者は、7年間で延べ201名(件)になりました。OB・OGチャレンジャーを含む平成25年度の主な実績を紹介します。

体験7期生	佐藤 麻梨乃選手 (陸上・棒高跳び [障害者スポーツ]/選手)
--------------	--

■ チャレンジテーマ	第22回夏季デフリンピック棒高跳びの部で優勝と世界ろう者新記録
	7月26日～8月4日にブルガリアで開かれた第22回夏季デフリンピック競技大会ソフィア2013で、自己記録を20cm伸ばす3m00(世界ろうジュニア新記録)で銀メダルを獲得しました。

体験3・7期生	竹花 康太郎選手 (陸上・棒高跳び [障害者スポーツ]/選手)
----------------	--

■ チャレンジテーマ	第22回夏季デフリンピック大会陸上競技・棒高跳びの部で金メダル獲得&世界ろうあ記録更新
	7月26日～8月4日にブルガリアで開かれた第22回夏季デフリンピック競技大会ソフィア2013で4m60を跳び、銅メダルを獲得しました。

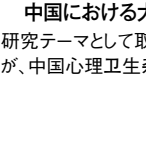
体験6・7期生	田井 小百合選手 (陸上・100mハードル [障害者スポーツ]/選手)
■ チャレンジテーマ	デフリンピック陸上競技100mハードルで金メダル獲得をめざす～聴覚障がいの母の挑戦～
	7月26日～8月4日にブルガリアで開かれた第22回夏季デフリンピック競技大会ソフィア2013の女子100mハードルで、銅メダルを獲得しました(14秒56)。また女子4×100mリレーにも出場し、日本チームは6位に入賞しました。

体験1期生	清水 小百合選手 (スケート[ショートトラック]/選手)
■ チャレンジテーマ	世界の舞台で、人々に夢と感動を与えられるスケート選手になるために
	12月13～15日に大阪で開かれたソチ五輪日本代表選手選考競技会に出場し、1000mと3000mリレーの代表に選考されました。ソチ五輪では3000mリレーで5位に入賞しました。

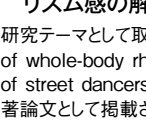
体験6期生	酒井 裕唯選手 (スケート[ショートトラック]/選手)
--------------	------------------------------------

■ チャレンジテーマ	世界の舞台で、人々に夢と感動を与えられるスケート選手になるために
	12月13～15日に大阪で開かれたソチ五輪日本代表選手選考競技会に出場し、500m、1000m、1500mの各クラス・計6レースのすべてで優勝し、バンクーバー五輪に続いて2度目のオリンピック出場を決めました。ソチ五輪では、500m、1000m、1500m、3000mリレーの4種目に出場し、3000mリレーで5位に入賞しました。

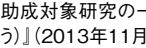
外国人留学生5期生	呂 路
------------------	------------

■ チャレンジテーマ	中国における大学運動選手の社会的スキルとスポーツ経験の影響
	研究テーマとして取り組んだ「中国人大学生版BPAQ攻撃性尺度の作成」が、中国心理卫生杂志に原著論文として掲載されました。

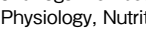
研究4期生	三浦 哲都
--------------	--------------

■ チャレンジテーマ	ストリートダンサーの優れたパフォーマンスを支えるリズム感の解明
	研究テーマとして取り組んだ「Action-perception coordination dynamics of whole-body rhythmic movement in stance: A comparison study of street dancers and non-dancers」が、「Neuroscience Letters」に原著論文として掲載されました

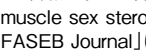
研究5期生	溝口 紀子
--------------	--------------

■ チャレンジテーマ	女子柔術・柔道における歴史社会学的研究
	助成対象研究の一部が掲載されている著書、『性と柔(女子柔道史から問う)』(2013年11月12日発行 河出書房新社)が出版されました。

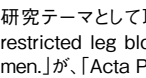
研究5期生	吉村 英一
--------------	--------------

■ チャレンジテーマ	急速減量・急速回復時のエネルギー代謝と体組成の変化に着目した研究
	下山寛之氏と取り組んだ助成対象研究、「Effects of rapid weight loss and regain on body composition and energy expenditure」が、「Applied Physiology, Nutrition and Metabolism」に原著論文として掲載されました。

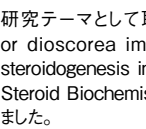
研究4期生	藤田 聡
研究5期生	家光 素行
研究6期生	佐藤 幸治

■ チャレンジテーマ	骨格筋肥大に関わるシグナル因子の特定ー運動・栄養のテラーメイド・プログラム作成への挑戦
	立命館大学の3名が共同で取り組んだ「Resistance training restores muscle sex steroid hormone steroidogenesis in older men」が、「The FASEB Journal」に原著論文として掲載されました。

研究5期生	尾崎 隼朗
--------------	--------------

■ チャレンジテーマ	血流制限下の歩行運動が筋サイズ及び有酸素能を同時改善するメカニズムの解明に関する研究
	研究テーマとして取り組んだ「Effects of walking combined with restricted leg blood flow on mTOR and MAPK signaling in young men.」が、「Acta Physiol」に原著論文として掲載されました。

研究6期生	佐藤 幸治
--------------	--------------

■ チャレンジテーマ	ヒト骨格筋における運動、食事が性ステロイドホルモン合成に与える影響
	研究テーマとして取り組んだ「Acute administration of diosgenin or dioscorea improves hyperglycemia with increases muscular steroidogenesis in STZ-induced type 1 diabetic rats.」が、「Journal of Steroid Biochemistry and Molecular Biology」に原著論文として掲載されました。

(2) 平成26年度(第8期生)の募集と決定

スポーツチャレンジ助成および国際スポーツ奨学金の平成26年度(第8期生)の募集を行い、書類選考による1次審査と面接による2次審査を経て、下記のとおり決定しました。8期生の助成金贈呈式は、3月14日、第7回YMFSスポーツ・チャレンジャーズ・ミーティングの会場で行いました。

助成対象者の内訳は、「スポーツチャレンジ体験助成」14件、「スポーツチャレンジ研究助成」14件、「国際スポーツ奨学金(海外留学生／外国人留学生)」4件です。第8期生の特徴は、若い世代のチャレンジャーが多く、特に「スポーツチャレンジ体験助成」には、東京オリンピック・パラリンピックをめざす4人のアスリートが含まれています。なお、第8期生の体験助成対象の平均年齢は10歳代7人を含む約20歳(7期生は約24歳)、研究助成対象の平均年齢は20歳代8人を含む約30歳(7期生は約34歳)です。

■ 応募状況

区 分		募集期間	応募数	採択数	助成金額(計)
体験助成	基本助成	9月2日（月） ～ 11月18日（月）	40	11	1,326万755円
	継続助成		4	3	
研究助成	基本助成		52	12	1,306万8,000円
	継続助成		2	2	
国際スポーツ奨学金			16	4	480万円
合 計			114	32	3,112万8,755円

■ 応募件数推移

区 分	1期生	2期生	3期生	4期生	5期生	6期生	7期生	8期生
体験助成	74	29	46	46	48	53	54	44
研究助成	101	65	75	84	90	97	73	54
国際スポーツ奨学金	16	23	17	20	19	17	22	16
合 計	191	117	138	150	157	167	149	114

■ 第8期生チャレンジャー

体 験 助 成		
氏名(基本/継続)	種 目	チャレンジテーマ
芦田 創	陸上・短距離種目(障害者スポーツ)/選手	短距離種目でのリオデジネイロ・パラリンピックへの出場、そして東京へ
内山 雅貴	自転車レース(ロードレース)/選手	東京オリンピック自転車ロードレースでのメダル獲得に向けた欧州UCIレースへの挑戦
大川 晴	アルティメット/指導者	コンゴ民主共和国での日本人アルティメット代表監督の挑戦 ～2016年世界大会に向けて～
荻原 京	スキー(フリースタイル・モーグル)/選手	ワールドカップ、世界選手権、オリンピックをめざして ～フリースタイルスキー・モーグル種目～
神下 夢夢	陸上・砲丸投げ(障害者スポーツ)/選手	「F46クラス男子砲丸投げ」の動作分析研究を通して2016年パラリンピック出場をめざす
佐々木 陽菜	フェンシング(サーブル)/選手	東京オリンピックでのメダル獲得をめざす ～フェンシング サーブル～
竹内 愛菜	アイスホッケー/選手	アイスホッケー北米大学リーグへの挑戦 平昌オリンピックへの出場および上位入賞
田中 康大	水泳(障害者スポーツ)/選手	頑張った結果は報われる ～2016年リオ・パラリンピック100m平泳ぎで再び表彰台の感動を～
藤田 拓哉	モーターサイクルレース(ロードレース)/選手	モーターサイクルロードレースにおける世界グランプリ日本人チャンピオンへの挑戦
三浦 優希	アイスホッケー/選手	常にエキストラリーグで活躍する選手となり、アイスホッケー日本代表を長野大会以来の五輪に導く
柳岡 はるか	フェンシング(フルーレ)/選手	2016・2020年のオリンピックでフェンシング日本人女子選手として初の金メダル獲得
小林 由貴	スキー(クロスカントリー)/選手	平昌オリンピックでのメダル獲得 ～クロスカントリー王国ノルウェーのクラブチームからの挑戦～
佐藤 麻梨乃	陸上・棒高跳び(障害者スポーツ)/選手	日本学生陸上競技対校選手権大会で女子聴覚障害者初の棒高跳び入賞をめざして
田中 幸太郎	レスリング(フリースタイル)/選手	オリンピック金メダルへの挑戦 ～レスリング フリースタイル～

研究 助 成		
氏名(基本/継続)	チャレンジテーマ	所 属
内田 昌孝	腸内細菌叢調節機構を介したメタボリックシンドローム発症に及ぼす自発的運動習慣の効果	川崎医療福祉大学大学院 医療技術研究科 健康科学専攻
内田 若希	障害のあるトップアスリートの自己変容に及ぼすスポーツドラマチック体験の影響	九州大学大学院 人間環境学研究院
江島 弘晃	筋細胞内のカルシウムイオン調節によるミトコンドリアの役割	電気通信大学大学院 情報理工学研究科 先進理工学専攻
大林 太朗	スポーツ史からみた関東大震災(1923年)と「復興公園」の歴史的意義	筑波大学 人間総合科学研究所 体育科学専攻
北岡 祐	エネルギー基質としての乳酸	東京大学大学院 総合文化研究科
庄子 博人	スポーツを核とした街づくりを担う「スマート・ベニュー」～スタジアムにおける新たなビジネスモデルの検討～	大阪成蹊大学 マネジメント学部
高木 新	低周波数電気刺激誘因性筋タンパク質合成はMAPK経路を介するか?	日本体育大学大学院 体育科学研究科
土屋 吉史	電気刺激で誘発した筋収縮が骨格筋由来の新規生理活性物質「Irisin」の分泌に及ぼす影響	立命館大学大学院 スポーツ健康科学研究科
西牧 未央	異なる急速減量の期間が生体内の酸化ストレス応答に及ぼす影響について ～レスラーの健康を考える～	早稲田大学大学院 スポーツ科学研究科
平山 邦明	ブライオトリクトレーニングによるパワー発揮能力向上のメカニズムの解明	早稲田大学 スポーツ科学学術院
藤井 慶輔	相手がいる状況においてバスケットボール選手が素早く動き出すメカニズムの解明	名古屋大学 総合保健体育科学センター
時苗 裕平	活性酸素種は運動効果を増強するか?	立命館大学 立命館グローバルイノベーション機構
福谷 充輝	なぜ反動によって身体運動パフォーマンスが増強するのか?ー反動による筋力増強機序の個別抽出による検証ー	立命館大学 総合科学技術研究機構
瀬戸 邦弘	世界に拡がる綱引き文化の動態研究ー民族綱引き文化の世界地図作成を目指してー	上智大学 文学部保健体育研究室

海外留学生奨学金		
氏名	留学国	留学テーマ
作田 飛鳥	アメリカ	ソマティックのスポーツ生理学的アプローチを取り入れた舞路訓練法の体系化と確立
		所属
		早稲田大学大学院

外国人留学生奨学金		
氏名	国籍	留学テーマ
サヤラット ボンナリー	ラオス	ラオスのスポーツ・学校体育の現状について ―運動有能感の視点から―
ソン ボギョン	韓国	水泳におけるパフォーマンス向上に有効な試合前のコンディションの自己調整法の開発
フィゲロア ゴンザレス イボリト ラファエル	メキシコ	後期高齢者用のADL(日常生活動作)年齢算出式の開発
		所属
		奈良教育大学大学院
		筑波大学大学院

※平成26年2月1日現在

(3) チャレンジャーに対する各種サポートプログラム

当財団では、助成対象者に対する助成金の交付に加え、年間を通じた各種サポートを行っています。目標と現状のギャップを明確にし、そのギャップを解消するための課題と具体的な取り組みを自ら計画し、四半期ごとの報告書提出と中間報告会での発表、さらに年度末に開催する「YMFS スポーツ・チャレンジャーズ・ミーティング」では成果報告を行うとともに、分野を超えた交流機会を設けることで相互刺激や研鑽を促進するなどの支援を行っています。

■特別チャレンジャー賞の贈呈

スポーツチャレンジ体験助成の対象者の中から、第22回夏季デフリンピック競技大会ソフィア2013に3名の選手が、ソチ2014オリンピック冬季競技大会に2名の選手が出場しました。この5選手には特別チャレンジャー賞(賞金10万円)を贈呈しました。



7月19日、デフリンピック出場3選手の激励会を開き、特別チャレンジャー賞を贈呈しました



3月14日、YMFSスポーツ・チャレンジャーズ・ミーティングの会場で、ソチオリンピック出場2選手に対して特別チャレンジャー賞を贈呈しました

■中間報告会(計5回)

9月から10月にかけて合計5回の中間報告会を開催しました。各チャレンジャーから活動の進捗報告が行われたほか、浅見俊雄審査委員長をはじめとする各審査委員からの激励やアドバイスが送られました。また、報告会の終了後には分野を超えた座談会を実施し、「道に迷ったら、壁に当たったら」をテーマに活発な意見交換を行いました。



中間報告会は、上半期の活動を振り返り、目標達成に向けて新たなスタートを切る機会



平成25年度は9～10月の間に合計5回の中間報告会を実施



第2回中間報告会には、3名のチャレンジャーがデフリンピックのメダルを持って参加



報告会のあとは、「道に迷ったら、壁に当たったら」をテーマに座談会を実施

■第7回スポーツ・チャレンジャーズ・ミーティング

毎年3月に開催する「YMFS スポーツ・チャレンジャーズ・ミーティング」は、スポーツチャレンジ助成事業の年度を締めくくる恒例行事です。平成25年度は3月14～16日の3日間にわたり、静岡県掛川市のヤマハリゾートつま恋にて開催しました。

本年度も第7期生やOB・OGチャレンジャーによる成果報告会を中心に、第8期生への助成金贈呈式、第7期生の修了式に加え、「語り・学び・考える3日間」をコンセプトにチャレンジャーのさらなる成長を支援するプログラムとして、基調講演「道に迷ったら、壁に当たったら」(浅見俊雄氏)、スポーツ討論会「『チャレンジする』ということ」(伊坂忠氏)、特別講演「東京2020オリンピック・パラリンピック開催決定を受けて ～招致活動を通じて日本が伝えたかったこと～」(坂牧政彦氏)等を実施しました。



8期生を代表して決意表明を行ったのは自転車ロードレースの内山選手



新たに32名のチャレンジャーを迎えた8期生の贈呈式



成果報告会では分野を超えてさまざまな質疑も行われた



7期生を中心に34名が発表を行った成果報告会



7期生27名に修了証を贈呈



デフリンピック銀メダルの佐藤選手が審査委員奨励賞を受賞



浅見審査委員長による基調講演



スポーツ討論会のテーマは「『チャレンジする』ということ」



2020招致活動を振り返った特別講演

第7回 YMFS スポーツ・チャレンジャーズ・ミーティング プログラム

日程	主な行事
3月14日(金)	平成26年度 第8期生 贈呈式 特別チャレンジャー賞 表彰式 平成25年度 成果報告会(2名) 基調講演「道に迷ったら、壁に当たったら」 浅見俊雄氏
3月15日(土)	平成25年度 成果報告会(23名) スポーツ討論会「『チャレンジする』ということ」 伊坂忠氏
3月16日(日)	平成25年度 成果報告会(9名) 特別講演「東京2020オリンピック・パラリンピック開催決定を受けて」 坂牧政彦氏 平成25年度 第7期生 修了式

2. スポーツ振興支援事業

スポーツ振興支援事業は、心身ともに健全な子どもたちの育成をめざし、ジュニアヨットスクールの運営やセーリング競技会の開催、スポーツ教材の提供、水辺の風景画コンテストなどを通じてスポーツをより身近に楽しむことや、自然・水辺体験の促進に取り組んでいます。

(1) ジュニアヨットスクール葉山の運営

ジュニアヨットスクール葉山では、「心身ともに健全な逞しい人材の育成」「チームリーダーの育成」「グローバルな人材の育成」という運営指針のもとに、葉山マリーナ（神奈川県）をベースにセーリングスポーツの指導を行うとともに、各種の自然・水辺体験学習を積極的に展開しています。

■平成25年度始業式

4月14日に葉山町漁業協同組合会議室にて平成25年度始業式を行いました。新年度は6人の新入生が加わり、始業式の後には特別講師を招いて自然災害にかかわる特別講習会と保護者会を開きました。



平成25年度のスクール生は全27人

■水辺の安全講習会

7月21日、スクール生とその保護者を対象に水辺の安全講習会を実施しました。この体験型講習会は海洋教育の一環として行うもので、例年同様、日本ライフセービング協会のインストラクターの指導のもと、水難事故防止を目的とした座学と実技講習を通じて「自分の命は自分で守る」知識と技術を養いました。



万一、海難事故に遭遇した場合の行動を座学と実技で学んだ

■浜名湖夏季合宿

7月31日～8月4日、静岡県浜名湖（静岡県立三ヶ日青年の家）で4泊5日の夏季合宿を実施しました。今年は（一社）ジュニアヨットクラブ連盟のジュニアセーラーとともに合同練習を行ったほか、ロンドン五輪470級日本代表の原田龍之介選手や当財団の柳敏晴理事らが特別コーチとして参加して19名のスクール生たちに指導を行いました。



ロンドン五輪代表の原田選手が特別コーチとして参加

■伊豆大島外洋帆走訓練

8月23日～25日の3日間、葉山から伊豆大島への外洋帆走訓練を実施しました。スクール生は、指導者たちに見守られながら葉山から大島への往復52マイル（約96キロ）の航海に挑み、全員で力を合わせながら目標を達成しました。また大島滞在中には、ネイチャーガイドやインストラクターの指導のもと、三原山火口へのトレッキングやシュノーケリングなどで大島の自然を楽しみました。



往復52マイルの航海を通じてチームワークを育んだ

(2) 第22回YMFSセーリング・チャレンジカップ IN 浜名湖の開催

3月21～23日、静岡県立三ヶ日青年の家（静岡県浜松市）を拠点に「第22回YMFSセーリング・チャレンジカップ IN 浜名湖」を開催しました。これまで全国のジュニア／ユース世代のセーラーの目標となってきた本大会ですが、近年は全国各地で春休みを利用した大会が多数開催されるようになったことから、セーリングの楽しさやヨットレースの面白さを体験・体感するイベントへと生まれ変わり、今年は18クラブ、78艇、103選手が参加しました。大会を通して北西の強風が吹き、レース初日の21日は瞬間最大風速が18m/秒となり全レースが中止となりましたが、翌22日からは10m/秒前後に落ち着いたため2日間で全5レースを実施しました。



大会を通じて北西の強風が吹く中、日頃鍛えた技術を競い合った選手たち



全国から18クラブ、78艇、103人のジュニア／ユースセーラーが参加



開会式で選手宣誓を行った静岡県立相良高等学校ヨット部の主将

第22回YMFSセーリング・チャレンジカップ IN 浜名湖 レース結果

OP級(参加21艇)		
1位	三浦風砂	静岡県セーリング連盟浜名湖ジュニアクラブ
2位	松原穂岳	海陽海洋クラブ
3位	小林 奏	宮津ジュニアヨットクラブ

ミニホッパー級(参加4艇)		
1位	森田智典	湖山池ドリームジュニア
2位	谷口 央	湖山池ドリームジュニア
3位	御殿夏帆	B&G高松海洋クラブ

シーホッパー級SR(参加28艇)		
1位	杉浦涼斗	海陽海洋クラブ
2位	豊島以知朗	レーザー光フリート
3位	児玉洋輝	なごやジュニアヨットクラブ

FJ級(参加25艇)		
1位	岩月大空／酒井幹人	碧南セーリングクラブ
2位	兵藤隆史／稲吉航洋	碧南セーリングクラブ
3位	杉浦悠也／坂口拓巳	碧南セーリングクラブ
女子優勝	内藤風香／川邊朱里	碧南セーリングクラブ



アテネ五輪の銅メダリスト、轟賢二郎氏が特別講師として選手を指導

(3) スポーツ教材の提供

心身ともに健全な子どもたちの育成を目的に、全国各地の保育園・幼稚園、小・中学校、特別支援学校、スポーツ団体（総合型地域スポーツクラブ、スポーツ少年団、各種スポーツクラブ）等を対象にスポーツ教材の提供を行っています。

平成 25 年度は、運動神経が急速に発達する幼児から中学生の子どもたちを対象にスポーツ機会の充実をめざした取り組みを計画している団体に対し、4 月 15 日～6 月 7 日の期間、スポーツ教材の提供先の募集を行いました。6 月 21 日には、厳正なる抽選を行い、1,131 件の申請の中から合計 120 団体の提供先を決定しました。また、スポーツ機会が著しく減少・縮小している被災 3 県（岩手県、宮城県、福島県）の 57 団体に対し、通常のスポーツ教材提供とは別に、申請のあったスポーツ教材を提供しました。



■平成25年度 スポーツ教材の提供先(順不同)

【サッカーボール】 赤穂市スポーツ少年団、(福) 扶助者聖母会星美ホーム、葉山町立葉山小学校、原フットボールクラブ、(学) 光明学園たから幼稚園、(学) 藤栄学園よこま幼稚園、千代田ジュニアレスリングクラブ、田村市大越こども園、西条市立西条小学校、(福) 伊奈美園、(福) 備作恵済会若松園、柏崎市立田尻小学校、当麻フットボールクラブ、一ノ谷スポーツクラブ、(学) 小さき花園幼稚園、豊橋市立中部中学校、(学) 睦美学園睦美幼稚園、山陽小野田市立増生幼稚園、(福) 松葉福祉会福島東保育園、(福) 松葉福祉会福島ぼなみ保育園、福島県立須賀川養護学校郡山分校、長門市立俣山小学校、(福) 愛和会ささやのぞみ保育園、福島市立渡利中学校、沖縄病院あゆみ保育園、横須賀市立大楠中学校、高槻市立第二中学校、福島市笹谷保育所、相馬郡新地町駒ヶ嶺小学校、(福) ひばり保育会、郡山市立喜久田中学校、石川郡平田村立蓬田小学校、郡山市立小泉小学校、福島市立福島第二小学校、郡山市立高野小学校、山田町立船越小学校、鎌ヶ谷市立五本松小学校、北茨城市立華川中学校、(学) 春日学園はなぞの北幼稚園、(福) わたり福祉会さくらみなみ保育園、(福) 共生会愛信学園、二本松市立大平小学校、青葉幼稚園、八女市立南中学校サッカー部、高千穂町立田原小学校「スポーツクラブ」、(学) 相愛学園認定こども園第一幼稚園、(学) 小原田学園小原田幼稚園、米子市立箕城屋小学校、(学) 成田学園希望ヶ丘幼稚園、善照学園、(福) あいむアメニティホーム広畑学園、与那原スポーツ保育園、高岡第一学園附属第五幼稚園、(学) 東明幼稚園、大阪市立三国中学校、郡山市立高倉小学校、五島市立福江中学校、伊平屋村立伊平屋中学校、(福) 愛心会可愛保育園、(学) 名古屋カトリック学園暁星幼稚園、青空 court(体動かし隊!)、しんせい幼稚園、白石サッカー協会、黒土少年サッカークラブ、本宮市立本宮まゆみ小学校、FC フレンズ、田野畑村スポーツクラブ、白石市白川保育園、いわき市立平第一中学校、(学) ワタナベ学園越谷保育専門学校附属古川幼稚園、三条市立笹岡小学校、サマードラゴン、(福) 神戸婦人同朋会子供の家、喜多方市立慶徳小学校、(学) 天美学園、アストロン、大阪市立弘清小学校、藤沢市立鶴洋小学校、南島原市立野田小学校、福島市立飯野中学校、児童養護施設日本児童育成会、ブライトリー FC スポーツ少年団、神奈川県立武山養護学校、福島市春日保育所、新地町サッカースポーツ少年団、SFC 坂出



【タグラグビーセット】 (福) 東京都社会福祉事業団東京都八街学園、西条市立三芳小学校、飛渡第一小学校、豊橋市立向山小学校、福島市立南向台小学校、登米市立石越中学校、西海市総合型地域スポーツクラブ大瀬戸アスリートクラブ、新宿区立落合第二小学校、尚学館小学校、五ヶ瀬町立上組小学校、郡山市立熱海小学校、石神クラブスポーツ少年団、大船渡市立大船渡北小学校、田村市立滝根小学校、宇城市立豊野中学校、盛岡市ハンドボールスポーツ少年団リトルハンド、塩竈市立杉の入小学校、旭市立古城小学校、須賀川市立第二小学校、伊達市立大石小学校、仙台市立中野栄小学校、高知市立第六小学校、角田市立西根小学校、角田市立角田小学校、角田市立桜小学校、東松島市立矢本西小学校、大阪府立豊中支援学校、伊達市立小手小学校、角田市立横倉小学校、下関市立熊野小学校、横手市立醍醐小学校、横手市立黒川小学校、戸田市立美谷本小学校、東松島市立野蒜小学校、(学) 宮沢学園富田幼稚園、ふくいスポーツクラブ、守山市立吉身小学校、本宮市立岩根小学校、NPO 法人うとスポーツクラブ、大阪市立新高幼稚園、山形市立鈴川小学校、福島市立大森小学校、東白川郡棚倉町立近津小学校、NPO 法人スポーツ「ライブ'91 天城、札幌市立東山小学校、山形市立第三小学校、最上郡金山町立有屋小学校、NPO 法人浜田フットサルクラブ、本宮市立本宮小学校、伊万里市立東山代小学校、角田市立北郷小学校、泉南市立鳴滝小学校、大阪市立矢田西小学校、守谷市立松前台小学校、葛飾区立木根川小学校、葛飾区立住吉小学校、中津市立今津小学校、(福) 優惠福祉会あやめ池保育園、葛飾区立中青戸小学校、力善柔道クラブ、聖ドミニコ学院小学校、佐倉市立佐倉東小学校、越谷市立明正小学校、立麻生養護学校、東近江市立能登川西小学校、福島市立福島第三小学校、土浦市立荒川沖小学校、NPO 法人しもむらスポーツクラブまいけ、南相馬市立福浦小学校、茨城県立つくば特別支援学校、札幌市立常盤小学校、かきの木幼稚園、泉大津市立上條小学校、和歌山市立福島小学校、双葉郡大熊町立大熊中学校、沓崎市立田河小学校、双葉園、山梨県立やまびこ支援学校、金ヶ崎町立三ヶ尻小学校、高浜市立港小学校、愛知県立豊橋雙学校、石垣市立明石小学校、加賀郡吉備中央町立円城小学校、鈴鹿市ラグビーフットボール協会、いわき市立小名浜第一小学校、ゆふいんチャレンジクラブ、二本松市立岳下小学校、札幌市立手稲山口小学校、夢 town 大洗スポーツクラブ、安達郡大玉村立玉井小学校、磐田市立豊田中学校



(4) 第 25 回「全国児童 水辺の風景画コンテスト」の開催

「全国児童 水辺の風景画コンテスト」は、未来を担う子どもたちが積極的に水辺に出かけ、発見・体験したことを、子どもらしい素直な表現で自由に描くことを通して感性を育み、のびのびと成長するための一助となることを願って平成元年より毎年開催しています。

平成 25 年度は、7 月 1 日～9 月 30 日の募集期間に、全国各地の幼稚園・保育園、小学校、絵画教室などから合計 9,842 点の作品が寄せられました。例年に比べて未就学児童からの応募が多く、前年度を約 500 点上回りました。なお入賞作品は平成 26 年 3 月 6 日～9 日にパシフィコ横浜で開催された「ジャパンインターナショナルポートショー 2014」の会場に展示したほか、当財団のホームページにて紹介しています。



文部科学大臣賞 掛川瑞生



環境大臣賞 竹見咲紀



農林水産大臣賞 吉岡楓矢



国土交通大臣賞 斉藤湖瑚

第 25 回「全国児童 水辺の風景画コンテスト」入賞者				
賞	氏名	学年	作 品 名	所 属
文部科学大臣賞	掛川瑞生	3年	楽しかったよ。千曲川ではじめてのニジマスつり	小諸市立野岸小学校
国土交通大臣賞	斉藤湖瑚	3年	よみがえれ!オアシス	むつ市立二枚橋小学校
環境大臣賞	竹見咲紀	3年	頑張れ海ガメ	平塚市立真土小学校
農林水産大臣賞	吉岡楓矢	5年	修繕中	明石市立二見西小学校
審査員長賞	武周吾	5年	カニをもつぼく	徳島市立内町小学校
日本マリナ事業協会会長賞	二宮広樹	5年	初めて釣ったぞ〜!	伊丹市立南小学校
日本ユネスコ協会連盟賞	大久保恵理佳	5年	ウグイが住むきれいな川	那須町立黒田原小学校
日本マリーナ・ビーチ協会会長賞	落合明純	5年	私の夏	川崎市立東小田小学校
ジャパンゲームフィッシュ協会会長賞	小原一敬	3年	大ものつれたぞ	南さつま市立加世田小学校
ヤマハ発動機賞	寺西宰	6年	水草アフロヘア仲間だ!	八頭町立船岡小学校
金賞(幼児部門)	伊藤勇人	年長	チョキン!カニさん	三次中央幼稚園
	日下菜那	年長	さかなとりのふね	名東保育所
	田代瑛大	年長	海のマシジョン	社会福祉法人誠和会ひまわり保育園
金賞(小学校低学年部門)	鎌田稔子	1年	うみにもぐったら	鳴門教育大学附属小学校
	谷口智哉	3年	サンゴの海で魚といっしょにあそぼう	磐田市立田原小学校
	千葉文寛	3年	たぐれの川遊び	練馬区立富士見台小学校
金賞(小学校高学年部門)	平野匠之助	4年	海からの贈り物	高知市立高須小学校
	福留明日香	6年	どろめの港 赤岡	高知市立大津小学校
	矢部優花	6年	楽しい浜辺	阿波市立八幡小学校
銀賞(幼児部門)	小川翔	年長	シャチ!!	水城保育園
	菊池優里菜	年中	たからもの	認定こども園 すみれ幼稚園
	住田清良	年中	すもう大会優勝	学校法人ハルナ学園ハルナ幼稚園
銀賞(小学校低学年部門)	鈴木梨夏子	2年	大海原に向かって	練馬区立高松小学校
	経田康太郎	1年	海の世界	三浦市立南下浦小学校
	ファンリッチグレースキ	3年	初めての“つり”	調布市立若葉小学校
銀賞(小学校高学年部門)	青嘉哲也	4年	大きなジンベイザメ	磐田市立青城小学校
	斎藤愛	5年	どろめ漁	高知大学教育学部附属小学校
	辻大輝	5年	生きる海	白浜町立白浜第一小学校
銅賞(幼児部門)	大村麻緒	年長	ざりがにみつけた!!	社会福祉法人和光保育園
	徳永煌輝	年中	おさかないっぱい	大泉保育園
	菅野雅人	年中	カサゴのムレ	社会福祉法人育子会子供の城保育園
銅賞(小学校低学年部門)	東俊輝	3年	トロメのみなと	高知大学教育学部附属小学校
	石川由依	2年	南の海の仲間たち	練馬区立富士見台小学校
	神山遼	3年	宮島	近畿大学附属小学校
銅賞(小学校高学年部門)	手塚悟	6年	水難救助訓練(横浜市)	中井町立中村小学校
	藤原大輔	4年	アジのむれ	加西市立北条東小学校
	前之園雄人	6年	桜島と高速船	屋久島町立宮浦小学校

3. スポーツ文化・啓発事業

当財団では、スポーツを通じた心豊かな社会づくりに寄与するため、スポーツチャレンジ賞（表彰）や調査研究活動をはじめ、各事業の実績や知見、情報を広く社会に発信しています。

（1）第6回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞

「ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞」は、スポーツ振興において多大なる実績を残すとともに、その功績によって社会の活性化に貢献した人物・団体を表彰するもので、受賞者のたゆまぬ努力と成果に敬意を表するものです。競技、指導、研究、普及、ジャーナリズムなどスポーツに関する幅広い分野において、高く評価されるに相応しい功績をあげられ、且つこれまで注目を浴びることの少なかった「縁の下の力持ち」的な人物・団体にスポットライトをあてています。また本賞では、チャレンジスピリットあふれる受賞者のプロセスやその実像を通して、挑戦（チャレンジ）することの尊さ、大切さや「努力は報われる」ことが社会に浸透していくことを願っています。

平成25年度（第6回）は、競技団体、大学、報道機関等から候補者の推薦を募り、功労賞・奨励賞候補合計13件の中から2回の選考委員会を経て功労賞・奨励賞各1件を選出し、平成26年4月22日、東京會舘（東京都千代田区）にて表彰式を開催しました。



第6回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 受賞者		
功労賞	白井 二美男 義肢研究員、義肢装具士	スポーツ用義足開発の第一人者として「走る喜び」を提供する挑戦
奨励賞	東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会 戦略広報部	戦略広報という立場から東京2020招致を支えたプロフェッショナル

■選考経緯／浅見俊雄選考委員長

スポーツ界を裏舞台から支える「縁の下の力持ち」を表彰するこの賞は、メダリストを表彰するのと違って選考については毎回非常に苦労する。しかし、本賞への理解は年を重ねるごとに深まっており、素晴らしい候補者の推薦をたくさんいただけるようになってきた。今回も功労賞8件、奨励賞5件の推薦や紹介をいただき、2回の選考委員会を経て受賞者を決定させていただいた。功労賞、奨励賞ともに賞賛されるに相応しい「縁の下の力持ち」であり、選考委員会としても非常に誇らしい気持ち。受賞された皆さんのチャレンジと功績に対して、あらためて感謝と敬意をお伝えしたい。

受賞者のコメント 功 労 賞

白井 二美男 氏（鉄道弘済会義肢装具サポートセンター、義肢研究員、技師装具士）

このような賞をいただける日が来るとは夢にも考えていませんでした。感無量であると同時に、あきらめず長く続けることで生まれる価値もあるのだと実感しています。まず、私の職場の皆さんにあらためて感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。鉄道弘済会という職場には個人的な研究やチャレンジを奨励するような土壌があり、私はこうした恵まれた環境の中で活動して行くことができました。もう一つ、嬉しかったことは、トップアスリートへの支援だけでなく、ごく一般的な義足使用者に「走る喜び」を提供するという取り組みに着目いただいたことです。私たちの役割は、義足使用者に力強く、いきいきとした暮らしをしていただくためのお手伝いだと考えてきました。世界で活躍するようなアスリートは、その中から自然に生まれてくる存在なのだと思います。これからも私の技術や経験、エネルギーが役に立つのだとすれば、2020年、さらにその先を見つめて力を注いでいきたいと思っています。

花岡 伸和 氏
（日本身体障害者陸上競技連盟 副理事長）

身体の一部を失った人に義足を提供し、まず立ち上がり、そして歩く、さらに走ってみようと思いをかけてその指導をする。白井さんが長年続けてこられたこうした活動は、アスリートの育成とは違った苦労があるものです。私たちアスリートは自分の頑張り次第でメダルをつかむことができますが、白井さんのような職人にはそうしたチャンスがない。だからこそ白井さんにメダルをかけてくださった選考委員会の皆様に、すべてのアスリートを代表して感謝したいと思います。



祝福
メッセージ

中森 邦男 氏
（公益財団法人日本障害者スポーツ協会 強化部長
日本パラリンピック委員会 事務局長）

白井さんの功績を振り返り、ゼロからの先駆者として立派な生き方をされているとあらためて感じています。義足を使用する人々にとって、できることを増やしていくのはたいへんなことであると同時に、大きな喜びとなるでしょう。中でも白井さんが取り組まれている「走る」ということの重要性、そして嬉しさは格段な喜びであるはずです。こうした地道な活動の中から、たくさんの人たちの目標となるアスリートが生まれてくることも願っています。



受賞者のコメント 奨 励 賞

鈴木 徳昭 氏（東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会 国際・戦略広報担当部門長 兼 戦略広報部部長）

皆様もご承知のとおり、招致活動は我々だけで進めてきたわけではなく、招致委員会のメンバーや東京都の職員の皆さんなど合わせて100人ほどが裏舞台で働いてきました。今回は、そうしたすべての縁の下の力持ちを代表して賞をいただいたものと考えています。今回の招致成功は、IOC総会でプレゼンテーションにも立ってくださった安倍首相をはじめ、文科省や外務省、日体協、JOC、アスリート、経済界、そしてメディアや国民の皆様の後押しなど、オールジャパンで、日本が一つになってつかんだ勝利です。日本には大きな目標ができました。その役割の一端を担わせていただいたことの誇りを糧にして、この国のスポーツのさらなる発展、そして2020の成功に微力ながら貢献したいと思っています。

高谷 正哲 氏（東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会 戦略広報部シニアディレクター代行）

2020年の招致活動を始めた時、広報担当は私一人でした。そこから同じ目標を持つ仲間たちが少しずつ増えていって、仲間という存在の素晴らしさを実感させてもらいました。招致は勝ち負けのつく仕事です。それだけに勝った瞬間のことは一生忘れないでしょう。日本は招致にあたって国際社会にさまざまな約束をしました。その約束を果たす姿を世界中に見せていくことが、（現在は東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会に在籍する）私たちの責務だと考えています。いずれにしても素晴らしい仲間と仕事をすることができ、それを皆さんに知ってもらう機会を与えていただいたことに感謝致します。

水野 正人 氏
（東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会
副理事長・専務理事、ミズノ株式会社顧問）

招致委員会が発足して以来、戦略広報部のメンバーとは一緒に仕事をしてきました。私たちはプレゼンテーションなどの表舞台に立たせてもらうこともあったのですが、その舞台を準備してくれたのがここにいる戦略広報部のメンバーです。膨大な仕事量を抱えながら難しい問題にも一つひとつ粘り強く確実に取り組み、そんな彼らがふらふらになって倒れそうになる姿に涙したこともありました。まさに招致成功の縁の下の力持ち。この喜びを2020につなげていきましょう。



祝福
メッセージ

佐藤 真海 氏
（陸上・走り幅跳び選手、サントリー所属）

最終プレゼンに立たせていただいた私にとって、戦略広報部の皆さんは戦友であり、また大切な家族でもあります。私たちは招致に向けて「スポーツの力」を世界にアピールしました。その力をもっともっと大きくするために、あの熱い気持ちを忘れず2020に向かって進んでいきましょう。また、白井さんについては、私が義足で走り出すその第一歩からサポートしていただき、白井さんの存在がなければその後の3度のパラリンピック出場もありませんでした。みんなに頼られ忙しい日々を送る白井さんの疲れた顔を見ると心配になりますが、これからもサポートをよろしくお願いします！



(2) 調査研究

当財団のこれまでの事業経験をもとに、スポーツ振興やスポーツ文化向上にかかわる社会的な課題の解決に寄与するため、当財団の特徴を活かし得る分野において調査研究委員会を設置して活動し、その成果を広く社会に発信しています。

■我が国のパラリンピアンを取りまくスポーツ環境調査 (平成25年度)

平成25年度の調査研究プロジェクトは、2004年以降の夏季・冬季パラリンピックに出場した競技者を対象に、競技環境や社会的、経済的な環境を調査する「パラリンピアンへのスポーツキャリアに関する調査」および「パラリンピック指導者の現状に関する調査」、平成24年度からの継続調査「パラリンピック競技団体活動調査」を実施し、この3編から構成する報告書「我が国のパラリンピアンを取り巻くスポーツ環境調査」をまとめました。

新しいスポーツ基本法とスポーツ基本計画によって、障害者も健常者と同じ環境でスポーツが実施できるための方向性が示され、スポーツ庁の創設によって両者の行政を一本化する計画が進められるとともに、2020年に東京でオリンピック・パラリンピックが開催されることも決まりました。本報告書および昨年度の大学に関する報告書が、障害者スポーツの環境改善の方向を考える上での資料として参考になることを願っています。

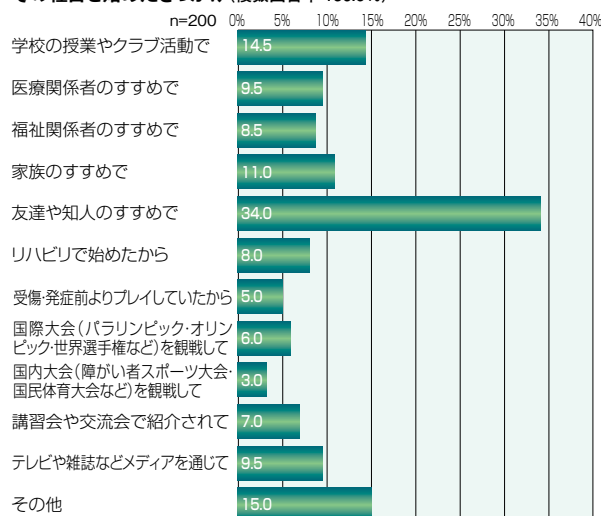


【調査・分析結果の要約】

※詳細は当財団ウェブサイトをご覧ください (<http://www.ymfs.jp/project/culture/survey/004/>)

パラリンピアンへのスポーツキャリアに関する調査

その種目を始めたきっかけ (複数回答率:136.5%)

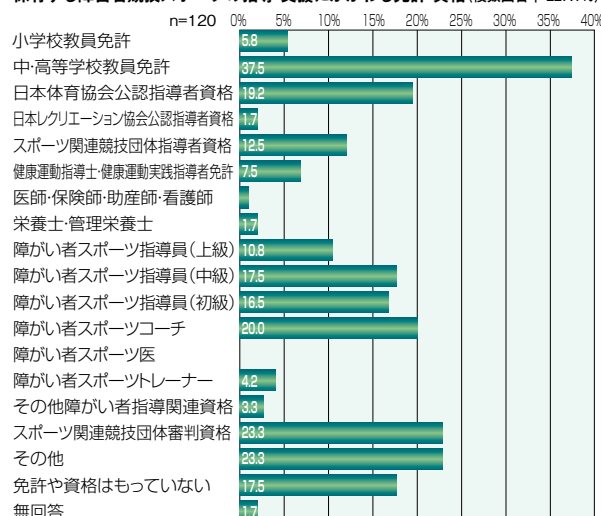


▶パラリンピック大会で出場した種目を始めたきっかけは「友達や知人のすすめ」(34.0%)が最も高く、「学校の授業やクラブ活動で」(14.5%)、「家族のすすめで」(11.0%)と続く。影響を受けた人物は「友人」(27.0%)、「トップアスリート」(24.0%)、「監督やコーチ」と「先輩や後輩」(22.0%)であった。

▶パラリンピック直前の1年間に支出した平均費用は「海外遠征」92.3万円と突出しかつ高額であり、次いで「競技用車イス」28.7万円、「合宿参加」26.4万円、「国内大会参加」23.3万円、「道具・器具・消耗品」19.6万円が続く。海外遠征への平均参加回数は3.3回、国内大会参加4.8回、合宿参加6.7回を数えた。

パラリンピック指導者の現状に関する調査

保有する障害者競技スポーツの指導・支援にかかわる免許・資格 (複数回答率:227.1%)

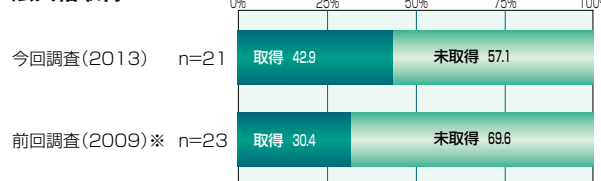


▶障害者競技スポーツ指導・支援にかかわる免許・資格の取得状況では、「中・高等学校教員免許」(37.5%)が最も高く、「スポーツ関連競技団体審判資格」(23.3%)、「障害者スポーツコーチ」(20.0%)と続く。複数の免許・資格取得者は6割(59.1%)、単一免許・資格取得者は2割(21.7%)、免許・資格を取得しない者が2割弱(17.5%)であった。最も多い取得数は6種類で4名を数えた。

▶パラリンピック大会直前の1年間における指導報酬を8割の指導者(80.8%)が受けないが、受けていた指導者は15.8%であった。受領者の内、契約を取り交わした指導者は16名で全体の1割を占める。指導・支援に協賛する企業は5割弱(45.8%)に達し、民間企業の参加が今後期待できる。

パラリンピック競技団体活動調査

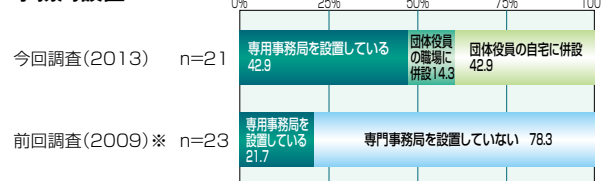
法人格取得



▶パラリンピック競技団体調査の対象は24件で21団体の回答を得た。21団体のうち9団体(42.9%)が法人格を取得するが、12団体(57.1%)が取得していない。

▶法人格を取得する9団体の内訳は、NPO法人4団体、一般社団法人4団体、未回答1団体であった。

事務局設置



▶21団体の事務局設置状況では、9団体が専用事務局を設置するが(42.9%)、3団体が団体役員の職場に併設し(14.3%)、9団体が団体役員の個人宅に併設する(42.9%)。法人化済み9団体では専用事務局6団体、団体役員職場2団体、団体役員個人宅1団体に、法人化予定8団体では専用事務局3団体、団体役員職場1団体、団体役員個人宅4団体に、予定しない4団体では団体役員個人宅4団体に、となる。

(3) 情報発信／広報活動の展開

スポーツ振興やスポーツ文化向上による社会の活性化に寄与するために、ホームページなどを通じて当財団の活動を広く社会に発信するとともに、その充実に努めています。

■ホームページ

当財団ホームページでは、高い目標に向かって取り組む助成対象者のチャレンジの紹介や、YMFS スポーツ・チャレンジャーズ・ミーティングで実施した各種講演の報告、またジュニアヨットスクール葉山の活動レポートや各種募集情報等を掲載しました。

さらに、平成25年度は、ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞のスペシャルコンテンツ「BACK STORIES」を開設。「縁の下での力持ち」の足跡や功績を紹介するとともに、チャレンジすることの尊さを広く社会に伝える活動をスタートしました。



YMFSホームページ

■チャレンジャーズ・ネットワーキング・システム(CNS)

チャレンジャー(助成対象者)同士の交流を目的とした「チャレンジャーズ・ネットワーキング・システム(CNS)」を運営しています。チャレンジャーに義務付けられる四半期ごとの報告なども、このシステムを通じて行われています。



CNS

■チャレンジャー会報誌「Do the Challenge」

OB・OGを含むチャレンジャーの活動を伝える会報誌「Do the Challenge」(A4判・4ページ)を5月、8月、12月に発行しました。



Do the Challenge

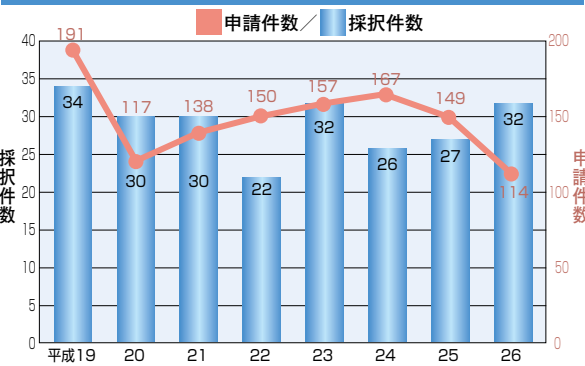
チャレンジすることの尊さを広く社会に スポーツチャレンジ賞のスペシャルコンテンツ BACK STORIESを新規オープン!

平成25年度より新たに開設した「BACK STORIES」は、ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞のスペシャルコンテンツです。「縁の下での力持ち」の存在を広く紹介するとともに、挑戦する心の尊さを伝えることを目的に、受賞者が高い目標に向けてチャレンジするそのプロセスをスポーツ誌等で活躍する近藤篤氏の写真と文章で紹介しています。平成25年度は、功労賞の受賞者である樋口豊氏(フィギュアスケートコーチ、振付師、解説者)と、奨励賞の受賞者である江黒直樹氏(ゴールボール女子日本代表チーム ヘッドコーチ)のチャレンジを紹介しました。

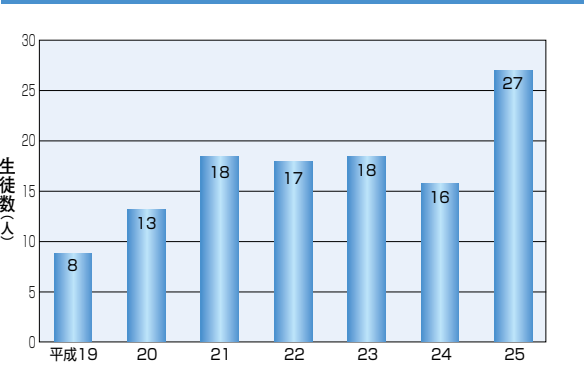


まとめ 図表で見るYMFS事業活動の推移

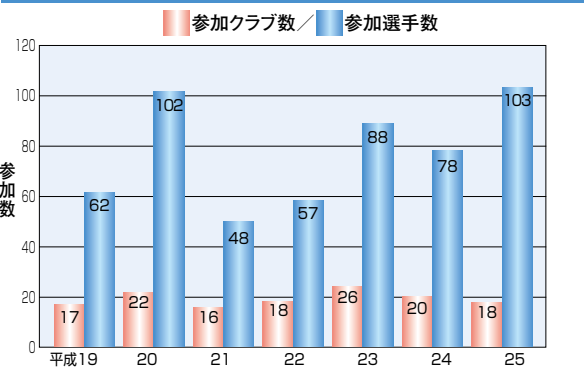
スポーツチャレンジ助成事業 申請・助成件数推移



ジュニアヨットスクール葉山 生徒数推移



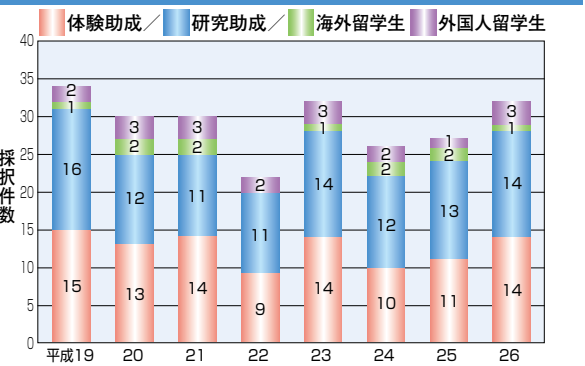
セーリング・チャレンジカップ IN 浜名湖参加数



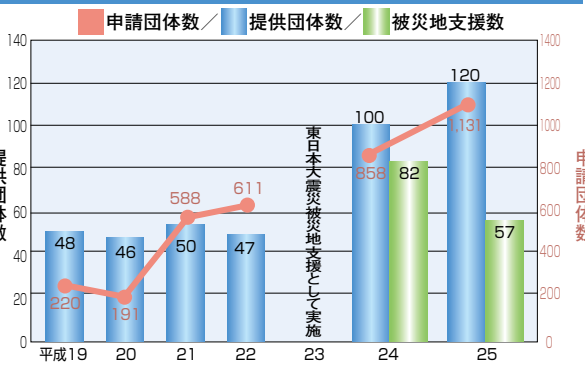
スポーツチャレンジ賞 歴代受賞者				分 野
		受賞者		
第1回 平成20年度	功労賞	中野政美	柔道指導者	
	奨励賞	丸山弘道	車いすテニス指導者	
第2回 平成21年度	功労賞	塚越克己	スポーツ医・科学研究者	
	奨励賞	増田雄一	アスレティックトレーナー	
第3回 平成22年度	功労賞	高田静夫	サッカー審判員	
	奨励賞	中村宏之	陸上指導者	
		中北浩仁	アイススレッジホッケー指導者	
第4回 平成23年度	功労賞	岸本健	スポーツ写真家	
		水谷章人	スポーツ写真家	
	奨励賞	(該当なし)	—	
第5回 平成24年度	功労賞	樋口 豊	フィギュアスケートコーチ、振付師、解説者	
	奨励賞	江黒 直樹	ゴールボール女子日本代表チームヘッドコーチ	
第6回 平成25年度	功労賞	臼井二美男	義肢研究員、義肢装具士	
	奨励賞	東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会 戦略広報部		

※組織名および肩書きは受賞当時のもの／敬称略

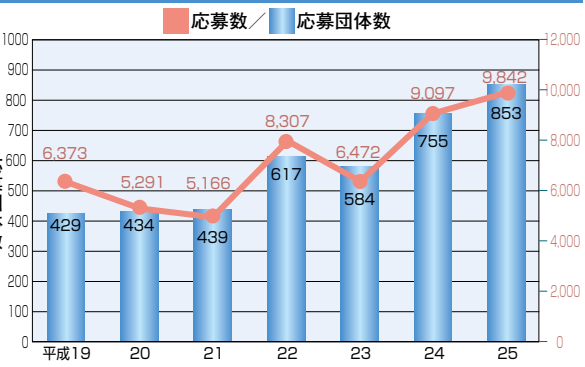
スポーツチャレンジ助成採択件数（内訳）



スポーツ教材の提供 申請数・提供数推移



水辺の風景画コンテスト 応募数推移



調査研究 報告書	
平成 24年度	「大学における障害者スポーツの現状に関する調査研究」 「海辺の自然体験活動および海洋教育の教育効果」
平成 25年度	「我が国のパラリンピアンを取りまくスポーツ環境調査」
	第1章 パラリンピアンへのスポーツキャリアに関する調査
	第2章 パラリンピック指導者の現状に関する調査
	第3章 パラリンピック競技団体活動調査

事業推進体制 平成26年3月31日現在 ※敬称略

評議員

役 職	氏 名	現 職
評議員	岡崎 助一	公益財団法人日本体育協会 専務理事 (元文部省競技スポーツ課長)
	塩谷 立	衆議院議員
	武井 一浩	弁護士
	戸田 邦司	一般財団法人日本海洋レジャー安全・振興協会 会長 (元運輸省海上技術安全局長)
	晁馬 明	浜松ホトニクス株式会社 代表取締役社長
	柳澤 伯夫	城西国際大学学長(元衆議院議員)
	柳 弘之	ヤマハ発動機株式会社 代表取締役社長
	遠藤 功	ヤマハ発動機株式会社 監査役
	大坪 豊生	ヤマハ発動機株式会社 顧問
	西山 正樹	ヤマハ発動機株式会社 顧問 (元警察庁中部管区警察局長)

理事

役 職	氏 名	現 職
理事長	木村 隆昭	ヤマハ発動機株式会社 代表取締役 副社長
常務理事	杉本 典彦	公益財団法人 ヤマハ発動機スポーツ振興財団 事務局長兼任
理事	浅見 俊雄	東京大学 名誉教授、日本体育大学 名誉教授
	伊坂 忠夫	立命館大学スポーツ健康科学部 教授(副学部長)
	伊藤 宏	公益財団法人 東京都体育協会 理事
	勝田 隆	筑波大学 客員教授(仙台大学 教授)
	定本 朋子	日本女子体育大学大学院研究科長・基礎体力研究所所長 教授
	佐藤 潤	公益財団法人 日本ラグビーフットボール協会 マーケティング委員長
	田原 淳子	国士舘大学体育学部 教授
	西田 善夫	スポーツアナリスト(元NHK解説委員)
	柳 敏晴	神戸常盤大学口腔保健学科 教授
	橋本 義明	ヤマハ発動機株式会社 取締役上席執行役員

監事

役 職	氏 名	現 職
監事	加山 秀剛	新日本有限責任監査法人 パートナー 公認会計士
	渡辺 政弥	ヤマハ発動機株式会社 統合監査部

スポーツチャレンジ助成事業 審査委員(体験助成)

役 職	氏 名	現 職
審査委員長	浅見 俊雄	東京大学 名誉教授、日本体育大学 名誉教授
	西田 善夫	スポーツアナリスト(元NHK解説委員)
審査委員	ヨコセッターランド	嘉悦大学バレーボール部 監督
	今給黎教子	海洋インストラクター、冒険家
	村田 亙	専修大学ラグビー部 監督
	丸山 弘道	名古屋グリーンテニス株式会社 ディレクター
	杉本 龍勇	法政大学経済学部 教授

スポーツチャレンジ助成事業 審査委員(研究助成)

役 職	氏 名	現 職
審査委員長	浅見 俊雄	東京大学 名誉教授、日本体育大学 名誉教授
	福永 哲夫	鹿屋体育大学学長・東京大学名誉教授
審査委員	伊坂 忠夫	立命館大学スポーツ健康科学部教授(副学部長)
	景山 一郎	日本大学生産工学部教授
	草加 浩平	東京大学大学院工学系研究科特任教授
	篠原 菊紀	諏訪東京理科大学共通教育センター教授
	綿貫 茂喜	九州大学大学院芸術工学研究院教授
	衛藤 隆	社会福祉法人恩賜財団母子愛育会日本子ども家庭総合研究所所長、東京大学名誉教授
	遠藤 保子	立命館大学産業社会学部教授、文化人類学・体育学
	川上 泰雄	早稲田大学スポーツ科学学術院教授
	小西 由里子	国際武道大学体育学部教授
	定本 朋子	日本女子体育大学大学院研究科長・基礎体力研究所所長・教授
	田原 淳子	国士舘大学体育学部教授
	山本 裕二	名古屋大学総合保健体育科学センター教授
	高橋 義雄	筑波大学体育系准教授

ジュニアヨットスクール葉山 指導員

クラス	担当コーチ
ベーシック／マスター	主任コーチ：湯原 浩一 (日本体育協会公認スポーツリーダー、救急救助員)
	コーチ：上松 康生 (日本体育協会公認指導員、救急救助員)
	コーチ：藤野恵梨香
	コーチ：竹腰真紀子 (栄養士)
	コーチ：安藤 嶺
	コーチ：長谷 美和子
エキスパート／クラブ	トレーナー：水野元晴 (アスレティックトレーナー)
	主任コーチ：箱守 康之 (校長、日本体育協会公認上級コーチ、JOCナショナル コーチアカデミー修了、日赤救急救助員)
	コーチ：松本 健司 (日本体育協会公認コーチ、救急救助員)
	コーチ：清水 大資 (日本体育協会公認コーチ、救急救助員)
	コーチ：飛内航太
	コーチ：日隈佑治
	コーチ：千足菜穂

スポーツ教材の提供 抽選者

氏 名	現 職
岡崎 助一	公益財団法人日本体育協会 専務理事 (元文部省競技スポーツ課長)

第25回「全国児童 水辺の風景画コンテスト」本選会審査員

役 職	氏 名	現 職
審査員長	工藤 和男	一般社団法人創元会 理事長 公益社団法人日展 評議員
	小川 尊一	一般社団法人創元会 常務理事・事務局長 公益社団法人日展 評議員
審査員	服部 譲司	一般社団法人創元会 会員、公益社団法人日展 会友
	小野 保	文部科学省 スポーツ・青少年局 青少年課 青少年体験活動推進専門官
	佐川 雅悦	国土交通省 港湾局 海洋・環境課 課長補佐
	佐藤 克子	環境省 水・大気環境局 水環境課 課長補佐
	柳瀬 知之	農林水産省 水産庁 漁港漁場整備部 計画課 課長補佐
	釣谷 康	一般社団法人日本マリン事業協会 専務理事
審査員	小出 寛治	公益社団法人日本ユネスコ協会連盟 評議員
	山下 雅人	一般社団法人日本マリーナ・ビーチ協会 理事
	岡田 正文	NPO法人ジャパンゲームフィッシュ協会 事務局 事業部長
	鈴木 正典	ヤマハ発動機株式会社 人事総務本部 総務部長
	杉本 典彦	公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団 常務理事・事務局長

調査研究委員会

役 職	氏 名	現 職
委員長	海老原 修	横浜国立大学 教育人間科学部 教授
	浅見 俊雄	東京大学・日本体育大学 名誉教授 公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団 理事
委員	藤田 紀昭	同志社大学 スポーツ健康科学部 教授
	高橋 義雄	筑波大学 体育系 准教授
	齊藤 まゆみ	筑波大学 体育系 准教授
	岡本 純也	一橋大学大学院 商学研究科 准教授
	田中 暢子	桐蔭横浜大学 スポーツ健康政策学部 准教授
	河西 正博	神戸医療福祉大学 社会福祉学部 助教
	難波 真理	天理大学 体育学部講師
	中森 邦男	公益財団法人日本障害者スポーツ協会 強化部 部長 日本パラリンピック委員会 事務局長
	滋谷 茂樹	公益財団法人笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所 主任研究員

ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 選考委員

役 職	氏 名	現 職
選考 委員長	浅見 俊雄	東京大学・日本体育大学 名誉教授 公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団 理事
選考委員	スポーツチャレンジ助成事業 審査委員が兼務	